

コインに軍配

— イランのおかねよもやま話 —

岩崎 葉子

テヘランでコインを使って最後に何かを買ったのはいったいいつのことであつたらうか、とんと思ひ出せない。ケータイが普及して公衆電話のお世話になることもなくなり、ただでさえ少なかったコインの出番は激減した。いまではプリペイドカードなどの番号のスクラッチや、栓抜き代わりに使う程度である。

重い、大きい、使いたくない、と三拍子揃ったイランのコインはイラン人にも敬遠されがちで、台所のすみの空き瓶に溜まるか、財布を軽くしたい人々が町のそこそこにある「慈善募金箱」に投げ込んでいくばかりである。

イラン中央銀行のウェブサイトによれば、目下イランでは記念硬貨を除くと五種類のコインが铸造されている。イランの通貨単位は「リヤール」というが、それぞれ

五〇リヤール、一〇〇リヤール、二五〇リヤール、五〇〇リヤール、一〇〇〇リヤールのコインである。このうち一〇〇、五〇〇、一〇〇〇については同額の紙幣もある(二〇一三年五月末現在、一〇〇〇リヤールは八円ちよつとくらい)。

ところが現在のイランでは日常的にこの「リヤール」という単位を耳にすることはほとんどない。人々が使うのは「トマーン」という単位である。一トマーンは一〇リヤールに相当する。なので、手のひらに一〇〇〇リヤールと銘打ったコインを載せていても、〇をひとつ落として「一〇〇トマーン」と呼ぶのである。外国人の筆者はつい「額面どおり」に数えてしまうが、イラン人はもはや無意識にこれを切り替えられる。

ところが困ったことには、レス

トランのメニューなど何かに書かれた価格はリヤール単位であることも多い。だから家具や家電など相場観のない高額商品を前にしたときは、ずらずらと景気よく並んだ値札の数字がいったい「リヤール」なのか「トマーン」なのか、確認せねばとんでもないことになる。もちろん値札の単位がどちらであつても、店員に値段を訊けば彼は「トマーン」単位で返答する。しかも「トマーン」すら省いていう場合もあつて、ややこしいことこのうえない。

さてリヤール表示のコインの裏面には、イラン人が一生に一度は詣でたいマシユハドのエマーム・レザーの聖所や、古都エスファハーンの観光名所であるサファヴィー朝期の巨大な石橋ボレ・ハージュなどの絵がかわいらしく彫られている。これに加えて五〇

〇リヤールコインには一三世紀の著名なペルシア詩人サアデーの廟も。さすがは世界有数の文学大国、これらを見るとイラン人が自国について何をとりわけ自慢に思っているか、力強く伝わってくる。

ちなみに紙幣のほうには、一九七九年のイラン革命の指導者ホメイニー師の肖像や、農村部で革命の理念に燃える農夫が畑を耕している場面などが印刷されていて、政治色が濃い。それに比べると、コインのほうはもっぱら文化遺産が採用されたデザインといえようか。見本をご覧になりたい方はこちら (<http://www.cbi.ir/section/1374.aspx>) を参照あれ。

さて、こうしたコインはインフレがすごい勢いで進行するなかで、そもそも日常の買い物にさえ使われることが少なくなつてしまひ、最近ではいずれもあまりお目にかからない。いまだき一〇〇〇リヤール単位でおさまる代金といえは、その辺の文房具屋でやってくるA4サイズのコピーサーピスや、身体に悪そうな子どもの駄菓子くらいである。財布がずっしり重いのは気分の悪いことではないが、たいして使いたくない小銭



筆者撮影

で財布がばんばんに膨らむよりは、五〇〇リヤールや一〇〇〇リヤールのような同額紙幣を使って買物するほうがスマートだ。

しかし、筆者は同じ価値ならあえてコインに軍配を上げたい。というのも、イランの小額紙幣には、コインの使い勝手の悪さをも凌駕する大問題があるからだ。すなわち、紙の質のせい（材質は一〇〇%コットンだそうだが）、はたまた人々の扱いがぞんざいなせいか、たいへんにもろいのである。日本の紙幣は、一回くらい洗濯機で洗ってしまったもびくともしない強さがある。世界に誇る和紙を素材に、国立印刷局の職人気質の技術者が凝りに凝って作っているのだから当然だ。ところがイランでうっかりこれをやると、ちょうどティッシュペーパーを汚れ物と一緒に洗ってしまったときのよ

うに、絶望的な状態に溶解してしまう。

洗濯機で洗わないまでも、流通している間に紙幣はみるみる劣化する。手垢にまみれて、心なしか異臭さえ放つ、古代エジプトの遺跡から出土したパピルスよろしく崩壊寸前になっている一〇〇〇リヤールを「おつりだよ」と渡されたときには、即座に断るのが賢い。ぼんやり受け取ったが最後、いつまでたっても自分の財布から去ってくれない。買い物に使いたくても、みなそれをババ抜きのパバのように嫌がって、受け取ってくれないからだ。

とは言え、イランで出回っている紙幣は十中八九（少なくともそのように感じる）、どこかしらに欠損・破損のあるしろものなので、日本の感覚からいえば「ええ、これもまだ現役なんですか」と驚愕するようなお札もあえて大事に使わねばならない。

だから筆者は夜なべ仕事に、折り目にそってきれいに半分は割れそうになっている何枚もの紙幣をセロハンテープで補強し、ババ

にならぬよう気をつけたものである。うっかりババを作りたくないと考える人は他にもいるらしく、ときどき糊の弱いごわごわしたイラン製セロハンテープで、しかし几帳面にお札の角が補修されているものが回ってきたりする。

嗚呼これが、一〇〇〇リヤールコインであったなら。もちろん、銀行へ持っていけば新しいお札と替えてくれる。しかしいったい誰が、一〇〇〇リヤールの新札のために時間と交通費を使ってそんなことをするだろうか？

こうして大事に使うと骨を折る市民がいる一方で、紙幣をメモ用紙がわりに使う不埒な輩もある。イランの紙幣はポロポロばかりではなく、たいがい、何やら汚らしい「走り書き」がしてあるのだ。

誰かのケータイの番号、怪しげな七、八桁の数字、住所……いっそやば、女子学生風の丸文字（アラビア文字でもこういう類のハンドライティングがある）で紙幣の片面にびっしりと何かが箇条書きに書き込まれているものがあつた。むむ、おおかたこれは学校にノートを忘れて、お札に授業内容でも書いたのかとよく読んでみる

と、料理のレシピであった。イランの人々はこれを案外、意に介さない。メモ用紙になったお札はババではないところが不思議である。

コインはもちろん、このような不当な扱いを受けることはない。破損もない。安心である。重くて使いでがないコインが細々と流通し続けているのは、何はともあれ耐久性に優れているからかも知れない。

紙幣に比べて持ちのいいコインは、気長に待っていればお宝に化ける可能性すらある。ネット上の古銭商サイトを覗くと、つい数年前までよく見かけた二五〇リヤール（大きなバイメタル貨であった）がなんと早くも売りに出されている。日常生活における出番があまりに少ないので、持って歩くのが面倒でつい空き瓶に溜め込んでいた筆者は猛省。お馴染みの二五〇リヤールコインが、サーサーン朝ペルシアのコインとともにネット上で売られているのを見て、我が家にも世界中の好事家の垂涎的がたつぷり眠っていることに気づいた。

（いわさき ようこ／アジア経済研究所 中東研究グループ）